

中学生クラスの実践報告

「中学校一日体験入学」

田中 義栄

目次

1. センター中学生クラスの位置づけと「体験入学」の目的

2. 「体験入学」の実際

2-1 実施前の準備

2-2 当日の活動

2-3 実施後の活動

3. 今後の課題

1. センター中学生クラスの位置づけと「体験入学」の目的

中国帰国者定着促進センター（以下センター）には日本の中学校編入を希望する中国帰国者二世・三世のための「中学生クラス」がある。「中学生クラス」が対象とするのは、二世・三世世代のうち、年齢が日本の中学校の学齢期にある者（13～15歳）、16歳、17歳で中国での学歴が中学校卒業に満たない者、16歳、17歳で中国では中学校を卒業しているが、強く中学校編入を希望しているため、中学生クラスでの学習を希望している者、17歳以上ではあるが、中国での学歴が中学校卒業を満たさず、強く中学生クラスでの学習を希望する者、である。期によって人数差はあるが、5～6人から10人程度で1クラスを編成している。センターの生徒たちは、4ヶ月の研修修了後、定着地の日本の中学校に編入されて学校生活を送ることになる。そのための準備として、センターでは、日本の学校の先生や同級生とコミュニケーションをとるための基本的な日本語の学習や日

本の中学校の学級活動に似せた実習、各教科の学習等を行っている（注1）。

中学生クラスの生徒にとってはセンターが日本で初めての学習の場となる。そのためセンターをできる限り現実の学校に近い形にしていきたい。しかし、センターと学校とは制度も設備も環境も異なるし、センターの教師も「学校の先生」にはなり得ない。なにより、日本人の同級生がいないのだから、生徒たちが準備でき、慣れることができるのは、「学校文化」という大枠についてのみである。そこで、こうしたセンターでの活動を一步踏み出したものとして、以下のような目的で「中学校一日体験入学」を実施している。

(1)「体験入学」を通じて以下の3つのことを生徒たちに実体験させる

中学校の校舎や施設・設備を見学する

授業を実際に受ける

日本の中学生や先生と話をする

(2)日本の中学校、中学校生活についてのイメージをより具体化し、漠然とした不安を和らげるとともに、自己にとっての課題が何かについて具体的に考える

(3)日本の中学生と接することにより、互いに容易に理解しあえる点と理解するのが難しい点があることに気づく

家族と共に宿舎で生活し、毎日研修棟に通って同じ帰国者二世・三世と机を並べている生徒たちにとって、日本にいながら現実の日本は垣根の隙間から垣間見える景色のようなものでしかない。中学生クラスの生徒たちには、同年代の中学生高校生と交流する機会はほとんどないと言ってよい（注2）。センターという限られた環境の中で私たちが与える情報だけでは、問題は知識のレベルでとどまってしまう、問題を問題として捉え、自分で考えるところまではいかない。しかし、不十分な日本語でも、体験入学を通して実際に日本人生徒や先生とコミュニケーションできたという体験が得られれば、それが「なんとかなる」との自信につながる。たとえコミュニケーションに失敗したとしても、その失敗体験を「どうしてだめだったのか」「次はどうすればいいのか」を生徒たちに考えさせる材料としたい。生徒たちに僅かな時間でも日本の中学校生活を体験させられれば、

センター修了後、自分がどんな立場に置かれるのか、日本で適応していくにあたって自分がどんな問題を考えるべきなのかを考えるきっかけとなるだろう。このように考えての体験入学の実際を、以下に紹介していく。

2. 体験入学の実際

2-1 実施前の準備

「体験入学」は第30期（90年5月）から始まり、現在の第52期（97年5月）まで、中学生クラスのあるときには欠かさず行われてきた。「体験入学」を受け入れてくださった中学校は延べ9校になる。始めた当初は、相手の中学校の方も国際交流を意識したイベント的なプログラムで全校生徒をあげての歓迎会を行ってくださるようなこともあったが、こちらの生徒には普段の中学校の様子を知ってもらいたいこともあり、今では「転校生が1人クラスに入ってきた」というような形で受け入れていただいている（注3）。

「体験入学」はセンターでの4ヶ月（16週間）のプログラムの中ではだいたい14週目くらいに行っている。これは、生徒たちが模擬学校としてのセンターの学習活動に慣れ、ある程度日本語を使って自分を表現できるようになっている時期であり、また、もうすぐ退所となるため中学校生活について各自が本気で考えていかななくてはならない時期だからである。次頁の表は、中学生クラスの時間割の例（13～14週）である。

中学生クラス学習予定表 第13週(月日~月日)

日付	第1時限目	第2時限目	第3時限目	第4時限目	第5時限目	備考	日直
月	学活	日本語	地理	日本語	体育		
日	今週の予定	読解 「中国の行事 と日本の行事」	関東地方	自己紹介文を 書く	野球		
(月)	テスト						
月	日本語	日本語	課題	日本語	行動		
日	もし~たら	可能形	ビデオを見る	ローマ字	電話連絡網		
(火)							
月	日本語	地理	日本語	地理	音楽		
日	読解 「中国式の誕生」	東北地方	自己紹介文 音読練習	世界の国々	リコーダー		
(水)							
月	日本語	日本語	歴史	日本語	体験入学		
日	名詞修飾	辞書	日中関係史	受け身	オリエンテー ション		
(木)					2 - 1 -		
月	日本語	体験入学	地理	体験入学	日本語		
日	受け身	調査課題決定	北海道地方	読解 「中学生の意 識調査」	個別指導		
(金)		2 - 1 -		2 - 1 -			
月	宿泊棟指導			今週の学習目標			
日	生活指導			・可能形、受身形を覚える ・体験入学の準備をする			
(土)							

中学生クラス学習予定表 第14週(月日~月日)

日付	第1時限目	第2時限目	第3時限目	第4時限目	第5時限目	備考	日直	
月	学活	体験入学	日本語	体験入学	体育			
日	今週の予定	靴の中身、規 則、生徒手帳	受け身と可能 の区別	授業の予習	テニス			
(月)	テスト	2 - 1 -		2 - 1 -				
月	地理	体験入学	課題	日本語	体験入学			
日	九州地方	読解 「給食メニ ュー」	ビデオを見る	使役形	直前準備と自 己紹介練習			
(火)		2 - 1 -			2 - 1 -			
月	体験入学							
日	中学校一日体験入学							
(水)	2 - 2							
月	体験入学	体験入学	体験入学	体験入学	体験入学			
日	感想、反省、 課題のまとめ	原稿作り	冊子作り、コ ピー、製本	報告会準備、 リハーサル	報告会			
(木)	2 - 3 -	2 - 3 -	2 - 3 -	2 - 3 -	2 - 3 -			
月	地理	日本語	体験入学	体験入学	日本語			
日	近畿地方	接続	編入後の問題	お礼の手紙を 書く	修了テスト準 備			
(金)			2 - 3 -	2 - 3 -				
月	宿泊棟指導			今週の学習目標				
日	生活指導			・体験入学に行く ・体験入学の報告をする				
(土)								

「体験入学」の準備としては、授業時間の7コマ（1コマ50分）くらいをあてている。学習項目及び内容は、だいたい以下の通りである。

オリエンテーション

目的：「体験入学」の意義、目的を説明し、センター修了後には中学校へ行くことを強く意識させる。

手順：「体験入学」での活動、中学校の1日のスケジュールについて説明する。ビデオ「中学校の生活」を見てイメージをつかむ。当日の授業科目を紹介し、参加クラスを決定する。

留意点：中国語で行う。中国での中学校生活を振り返らせながら行う。学校制度の違いについても注意する（注4）。

調査課題決定

目的：中学校で見てきたもの、感じたことを意識化できるように、調査課題を決定する。

手順：全員の共通課題と各自の自由課題を決める。共通課題はそれぞれ入ったクラスで受けた授業について、受けた学科、学習内容、勉強した場所、先生の教え方、生徒の態度・様子、中国の学校との授業比較、感想等をまとめる。自由課題は、日本の中学校・中学生についてどんなことが知りたいかを話し合い、調査項目を生徒が決定し、みんなで分担する。自由課題はだいたい観察するものとアンケート調査に分けられる。観察するものとしては、生徒の服装（制服の形、色、スカートの長さ、体操服、髪型等）、給食（内容、味、量等）、施設（教室、特別教室、体育館、プール等）、そのほか生徒の持ち物等があげられる。アンケート調査は、聞きたいこと（好きな学科、スポーツ、部活動、休日の過ごし方、好きな歌手や歌、等）をクラスで出して各自が分担し、教師の助けを借りながら日本語で質問文を考え、アンケート用紙を作成する。

留意点：アンケート調査については相手が短時間で答えられるものとする。

読解「中学生の意識調査」

目的：日本の中学生の考え方（生活や価値観等）に触れる。グラフの見方がわかる。

手順：「中学生の意識調査」という読解教材を使い、グラフの読み方などを学習しながら日本の中学生の考え方に触れる。内容は、日本、中国、アメリカの3カ国で中学生の生活や価値観等について（クラスの人気者、悩みや心配事等）調査したものである。ここではまずそれぞれの話題について彼等の意見をいろいろ聞いてから、資料の読み取りに入っていく。

留意点：できれば中国語で行い、生徒の意見をたくさん引き出す。資料の中に日本と中国以外の国を入れてあるのは、日中比較だけではなく国によっていろいろな考え方があることに気づいてもらいたいためである。

鞆の中身、規則、生徒手帳

目的：日本の中学生の持ち物及び中学校の規則について知る。

手順：日本の中学生が自分の持ち物を紹介しているビデオを使い、それを見ながら持ち物を確認していく。次に生徒手帳を見定める。生徒証明書、学校と家庭との連絡欄、欠席の時などに使う諸届け欄の意義や使い方等を簡単に説明し、学校の決まり、特に服装や校内生活についての読み取りを行う。

留意点：中国の学校生活を振り返りながら行う。校則は学校によって違うところも多いので、実際に行く中学校から生徒手帳をいただいた場合にはそれを教材とするが、そうでない場合には今までいただいた学校の生徒手帳を使い、学校によって校則は少しずつ違うこともしておく。

授業の予習

目的：実際に受ける教科の予習をすることで中学校の教科内容の一端を知ると同時に、当日参加する授業に対する不安を軽減する。

手順：先方からいただいておいた当日授業分の教科書のコピーを使い、各教科と学習項目について、だいたいどんな授業をするのかを説明し、どのように予習したらよいかをアドバイスする。わからないところを教師

に質問しながら各自自習を進める。

留意点：中学校に編入してからのことも考え、放課後や休み時間に教師の所
に行って教えてもらう方法も提示する。

読解「給食メニュー」

目的：給食の献立表を読み取る。食事の話題で話をする。辞書を引いても
わからないとき、どうするかを知る。

手順：先方からいただいた1ヶ月の給食の献立表を渡し、当日の献立を探
す。メニューを見てもわからないものについては辞書を引いてみたり、
「これ、何ですか」と言ってほかの人（ここでは教師）に尋ねる練習を
して実際に授業担当外の教師に聞きに行かせる。聞きに来られた教師は、
材料と作り方を説明したり、筆談をしたり、絵を描いたり、あるいは本
棚から料理の本を引っ張り出して写真を見せたりしてメニューの説明を
する。そしてメニューの内容がわかったところで、それに関するやりと
りをする。嫌いなものが出たときのことを考え、「苦手です」とか「こ
れはちょっと…」といった婉曲的な断り方を練習する。あとは「いただ
きます、ごちそうさまでした」等食事の挨拶や、場合によっては栄養素
の講義を行うこともある。

留意点：中国では一般に昼食は家にかえって食べる人が多いようで、ほと
んどの生徒にとって学校での給食は初めての経験である。慣れていない
ものは食べない、という姿勢ではなく、とにかく体験してみよう、とい
う気持ちに持っていく。

直前注意と自己紹介練習

目的：「体験入学」直前の注意をする。自己紹介場面の準備をする。

手順：当日のスケジュール、持ち物、各自の課題、身だしなみ等の最終的
な確認と、当日困ったことが起きたときの対処について話し合う。それ
からクラスに入ったときのために簡単な自己紹介の練習をする。質問さ
れたときの答え方の練習、わからないときの対処の仕方等を確認する。
ビデオで録画してフィードバックすることもできる。

留意点：この時期になると、もう簡単な自己紹介はそれほど難しくないので、質問が聞き取れないときや伝わらないときどうしたらいいかというストラテジーや、大勢の前で発表するときの態度に気をつけるようにする。

2-2 当日の活動

中学校の授業時間により違いはあるが、概ね以下のようなスケジュールで行っている。

10：30	中学校到着、学校長に挨拶
10：50～11：35	校舎内見学
11：40	3時間目終わりに各クラスに入り、簡単な自己紹介をする。
11：50～12：40	4時間目、各クラスで学科の授業に参加
12：40～13：10	給食 各クラスの生徒と一緒に
13：10～13：35	昼休み
13：40～14：30	5時間目、各クラスで学科の授業に参加
14：35～14：50	掃除
14：55～15：05	学活
15：05～15：30	学校長に挨拶、部活動見学
15：30	中学校出発

このように、「体験入学」では授業に参加するだけでなく、掃除や学活も日本の中学生と一緒にやる。また、給食当番もできればやらせてもらうようにしている。

2-3 実施後の活動

実施後のまとめとしては、授業時間の7コマ（1コマ50分）くらいをあてている。学習項目及び内容は、だいたい以下の通りである。

感想、反省、課題のまとめ

目的：前日の1日を振り返り、体験を意識化する。

手順：「体験入学」の感想、反省を聞く。そして共通課題と自由課題についてわかったこと、感じたことを1人ずつ発表し、アンケート結果の報告と分析を行い、報告会での手順を決める。

留意点：中国語で行う。中国の中学校と比較しながら行う。

原稿作り

目的：前の時間に意識化したことを文にまとめる。中国語で簡潔な説明文を書く練習をする。

手順：この時間で、報告会するとき父母に手渡す冊子の原稿を作る。原稿の内容は前の時間に話し合ってまとめたものである。記入のフォームをだいたい決めておき、各自で記入していく。

留意点：原稿を中国語で書くのは父母に理解してもらうためでもある。

冊子作り、コピー、製本

目的：報告会で用いる冊子を自分たちで分担し作成する。

手順：できあがった原稿をまとめ、コピーして製本する作業を行う。

留意点：教師の指示を聞きながらコピー機を使ったり、手際よく流れ作業的な共同作業をすることも学習項目の一つであると知らせておく必要がある。

報告会準備、リハーサル

目的：報告会の手順を確認し、分担して報告会を運営する準備をする。

手順：報告会の進行役を決めて、リハーサルを行う。報告会のイメージをつかむために以前の期の生徒が行った報告会のビデオを見せることもある。

留意点：中国にいたときは大勢の前でなにかを発表するといった機会は少なかったと思われる生徒もいるため、わかりやすく、きちんとした態度で話すことにも注意させる。

報告会

目的：父母に「体験入学」の報告を行う。父母の質問に答える。クラスで協力して報告会を運営する。

手順：報告は父母がわかるように、また自分たちの言いたいことがきちんとと言えるように中国語で行う。1人1人の報告の後には父母に自由に質問をしてもらう。父母からの質問がなかなか出ないときには教師が質問する。

留意点：父母にはできるだけ日本の中学校の状況を知ってもらい、編入後もいろいろな意味で子供と学校に関心を持ってもらえるようにしたい。これも報告会を行う重要な目的の一つである。

編入後の問題

目的：編入後の問題について考える。

手順：編入後に直面するであろう困難について考え、話し合う。差別やいじめ、生活習慣（物の貸し借り、衛生観念、食べ物のにおい、お弁当の中身）等、例をあげて話をする。すべて日本人のやる通りにやるのがよいわけではないが、こんな考え方もあるとか、どうしてなんだろうと考えることで、不必要な誤解を避けられることがあるかもしれない。相手に自分の考えを説明してわかってもらうことも時には必要だろう。また、学校側の受け入れについても、帰国者の生徒や外国人生徒を今までに何人も受け入れている学校の場合は何か問題があったときでも対処に慣れているであろうが、初めて受け入れる場合は学校の方でもどうしてよいかわからないこともあるであろう。こういったことについて生徒の意見を引き出しながら話し合いを進めていく。

留意点：中国語で行う。困ったことがあったら自分1人で悩まずとにかく担任の先生や自立指導員、あるいは中国語で相談できる機関に積極的に話してみるよう勧めている。

お礼の手紙を書く

目的：お礼の手紙の書き方を知る。封筒の表書きの書き方を知る。

手順：まず手紙の書き出しや構成を考える。その後お礼の手紙として書く内容についてやりとりをする。授業はわかったか、中国と比べてどうだったか、先生はどんな人だったか、生徒とは話をしたか、仲良くなれたか、給食はおいしかったか、全部食べられたか、休み時間は何をしたか、掃除はどうだったか、緊張したか、どんなふう感じたか等についてやりとりをし、それを教師が手伝って日本語にしながら書かせ、清書させる。あとは封筒に宛名を書いてポストに入れる。

留意点：彼等が日本語で手紙を書くのはおそらくこの時が初めてであるため、宛名の書き方、自分の住所の書き方から指導する。

センターの生徒の反応としては、「漠然とした不安が無くなり、勉強（日本語）はわからないがなんとかやっていけそう」というのがほとんどである。また、この体験入学を機に学習に対する姿勢が変わった生徒も多い。しかしながら毎回いい思い出だけが残るとは限らない。中には緊張のあまりトイレに隠れてしまっ出てこなかったり、中学校の生徒と喧嘩をして途中で中学校を飛び出していったこともある。いずれにしても、良いことも悪いことも含めて、ここでの体験が今後の中学校生活についていろいろと考えるきっかけになることは確かである。

相手の中学生の反応は、以前感想文をいただいたことがあるのでその中から拾ってみると、「中国の人に会うのも話をするのも初めてでとてもドキドキした。」「はじめはどう接してよいかわからなかったが、すぐ友達になれた」「漢字を使うと話もできるし、漢字は便利だとあらためて感じた」「中国人は日本人に似ていてなじみやすかった」等、初めて接する中国人（外国人）に戸惑いながらもすぐに仲良くなって、彼等が自分たちと同じであることに気づき、そこから何か新しい発見をしていることが伺える。

3. 今後の課題

センターの生徒たちは、過去に実施した「体験入学」から大きな収穫を得ることができた。これまでの貴重な実践例を今後につないでいきたいと思う。こま

で主にセンターの生徒が得られる収穫について述べてきたが、「体験入学」は日本の中学校側にも得るべきものをもたらすと考える。教育の国際化が唱えられている昨今、「体験入学」がその一端を担えるということである。センターの生徒が異文化として存在することについて、日本人生徒はどう考えどう行動するだろうか。考え行動するその過程において、日本人生徒も様々な体験をするだろう。双方の体験一つ一つが異文化理解に向けてのきっかけとなることを確信している。センターとしては、今後さらに受け入れてくださる相手の中学校を増やしていき、できるだけ多くの中学生に異文化を体験してほしいと思っている。

また、この「体験入学」はセンターでの4カ月間の「模擬学校」の中で、唯一実際の中学校生活を体験できる非常に貴重な機会ではあるが、やはり「1日」という限界がある。中学校で感じたり体験したことの中で、不思議に思ったことや疑問に思ったことをセンターに持ち帰ってみんなで話し合ってみても、実際の場でそれを確かめてみるができない。できることならそういったことをフィードバックしながら、もうすこし長い期間で（3日とか1週間とかいった単位で）「体験入学」が実施できるようになればよいと思うし、また、将来的には中学校もそのような「体験入学」を特別な準備なしでいつでも受け入れられるくらい開かれた場になってほしいと思う。

（注1）教科の内容を教えるのではなく内容以前に了解しておかなければならない約束事と技能を身に付けること、シミュレーション授業の活動を通して授業で用いられる授業特有の日本語と教室特有のやりとりに少しでも慣れることを目標としている。

（注2）センターの大人や青年の学習者には近隣のボランティア団体や、大学生等、講師以外の日本人と接する機会が多々ある。

（注3）生徒にとっては初めての体験でとまどうことも多いため、クラスに1人か2人世話係の生徒を決めてもらって対応してもらっていることもある。

（注4）日本の学校は4月に始まるが、中国の学校は9月に始まるところが多い。また、日本では年齢が同じであれば同じ学年というのが普通だが、中国では地域によって年齢の違う兄弟が同じ学年で勉強していたりすることも珍しくない。

[引用・参考文献 / 資料]

池上摩希子(1994)「日本語教育が必要な児童生徒対象の教育目標構造化の試み」
中国帰国者センター紀要第2号

安場淳、池上摩希子、佐藤恵美子(1991)「異文化適応教育と日本語教育1 体験
学習法の試み」凡人社

池上摩希子「中学生クラス一日体験入学に関する資料」中国帰国者定着促進セン
ター教務課編